②論文要旨（博士後期課程）

論　　文　　要　　旨

申請者氏名　蔡 嘉紘

申 請 学 位　博士（言語教育学）

主論文題目　　感情の表現形式による分類

―直接的表現から客観的表現まで―

主論文要旨（邦文は４，０００字以内
外国語は２，０００語以内）

第一章　はじめに

1.1 研究動機と目的

筆者が日本語学習を始めた時に、もっとも困ったことは、人称や、動作性の有無などによって感情や欲求、あるいは感覚などの表現のしかたが変わるということであった。このような日本語の特徴は、母語にそのような複雑な違いの存在しない学習者たちを大いに混乱させる。

本研究は、このような複雑な日本語の感情や欲求、あるいは感覚などの表現体系を研究し、新たな分類方法を立てようとするものである。この分類によって感情や欲求、あるいは感覚などの表現全体の構造を明らかにし、より体系的な指導法の基礎とし、日本語教育にいくばくかの貢献をすることを目指している。

１．２ 研究方法

まず、本研究においては、「**感情、感覚や欲求などの心理的また生理的な内部の心の動き、およびそれによって生じる外部の反応や動き**」などを研究対象とするが、これらを「**感情表現**」として一括して表記することにする。また、従来の人称による感情表現の使い分けに関する先行研究を分析し、その問題点を明らかにし、新たな表現形式による分類方法を立てた。

また、新たな分類方法は、持続時間という大きな要素に左右される。そのため、感情の持続時間に関する先行研究を基づき、感情表現の持続時間の特徴を解明し、新たな分類方法の理論を補完することにした。
さらに、『日本語教育のための基本語彙調査』と『現代雑誌九十種の用語用字』の使用率順語彙表を用いて日本語教育における使用率の高い語から選択した。選択した各語の用例を収集し、その語の特徴および表現形式を明らかにし、その語の分類を行った。最後に、各分類の語を分析し、その共通点、および相違点を明らかにした。その結果に基づいて、感情表現全体の関係を明らかにした。
１．３　本論文の構成
第一章　はじめに
第二章　感情表現の使い分けに関する先行研究
第三章　感情表現の表現形式
第四章　感情表現の生起性と恒常性
第五章　感情表現の各語句の分析
第六章　まとめおよび将来の展望
第二章　感情表現の使い分けに関する先行研究
従来の先行研究において、一人称には形容詞を使い、三人称には動詞を使うという共通認識があるが、倉持（1986）は「腹が立つ」、「腹を立てる」、加藤（2001）は「楽しむ」、大曾（2001）は「思う」、「困る」や「いらいらする」といった感情動詞（句）や擬態語でも一人称が使えると指摘している。また、「テイル形」、「タ形」および「ようだ／みたいだ／らしい」といったモダリティを付加することによって主語を三人称に変更することが可能なので、人称によって感情表現の言葉を区別することは不適切であると思われる。
また、倉持と加藤は感情動詞（句）の中で、性質は動詞より形容詞に近い言葉を発見した「腹が立つ」、「楽しむ」）。さらに加藤は「楽しむ」と「楽しい」、大曾は「―む」動詞と「―がる」という接尾辞は、同じ人称で表されてもその感情表現のニュアンスは異なると指摘している。
第三章　感情表現の表現形式
３．１　感情表現の特徴
本研究は寺村（1982）の（１）感情を表情または動作で表すもの、（２）話し手自身の気持ちを直接に表出するものと神尾（1990）の自分の領域（なわばり）の内にある情報は直接形で

表現可能であり、それ以外の情報は間接形を用いなければならないという二つの理論を取り上げ、「直接感情表現」と「間接感情表現」という二つの分類を新たに立てた。さらに、この「直接感情表現」と「間接感情表現」の両方になり得る感情表現を「直接・間接同形感情表現」と呼ぶことにする。

「直接感情表現」：内在的、感情主のみが直接知り得る感情の表現

「間接感情表現」：外在的、表情または動作などで表わされる感情の表現

「直接・間接同形感情表現」：「直接感情」も「間接感情」も表せる感情表現

３．２　直接感情表現とその下位分類

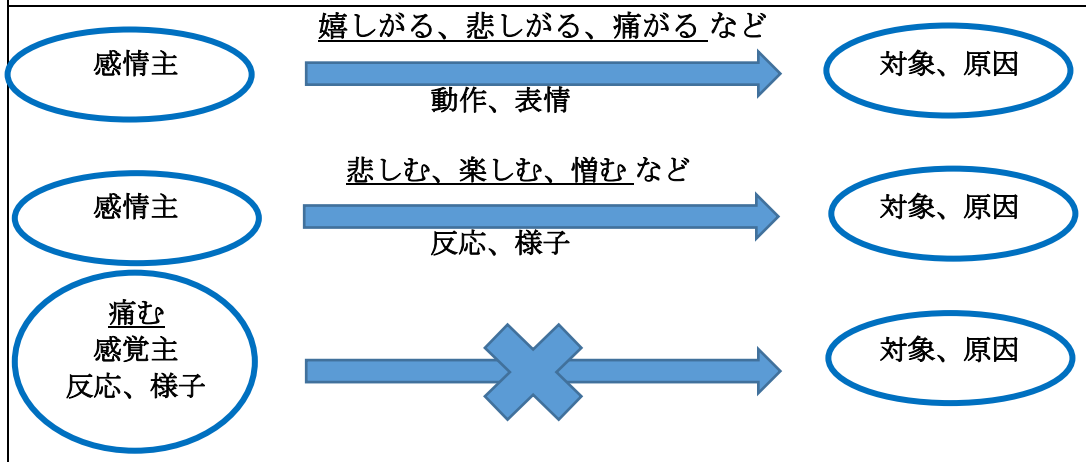
直接感情表現のもっとも顕著な特徴はその感情が感情主自身のみが知り得るものであるが、純粋に感情を表すとは限らず、感情そのものを基準としてある物事を評価、判断することもできる。この属性的に表される感情表現と純粋に感情そのものを表す感情表現を区別するため、「純粋直接感情表現」と「属性直接感情表現」に分けることにした。

純粋直接感情表現：純粋に感情そのものを表す感情表現

属性直接感情表現：感情を基準としてある物事を評価、判断する表現

３．３　間接感情表現とその下位分類

間接感情表現は外在的な表情または動作などで表わされる感情表現であるため、必ず外部から観察することが可能である。また、明確な動作あるいは行為などで外部に感情を表す感情形容詞の接尾辞「―がる」に対して、感情形容詞の動詞化（「―む」動詞など）は感情主がある対象に対する、あるいは、原因から生じる感情的反応である。さらに、「痛む」は志向性がなく、痛みから生じてくる本人しか知り得ない生理的な反応である。



［図１］　接尾辞「がる」、感情形容詞の動詞化、「痛む」との差異

この三者を区分するため、「間接反応間接感情表現」と「直接反応間接感情表現」といった新たな下位分類を立てることにした。

間接反応間接感情表現：ある対象に対する、あるいは、原因から生じた感情的反応

直接反応間接感情表現：本人しか知り得ない生理的な反応

３．４　直接・間接同形感情表現

直接感情または間接感情を表す感情表現のほかに、直接感情と間接感情のその両者を表わせる「直接・間接同形感情表現」が存在する。

３．５　まとめ

本章は表現形式による新たな分類方法の各分類の定義と相互関係を以下のように学習者にとって分かりやすい形に整えた。

- 感情表現
  - 直接感情表現
    - 純粋直接感情表現（ほとんどの感情形容詞）
    - 属性直接感情表現（ほとんどの感情形容詞）
  - 間接感情表現
    - 間接反応間接感情表現（「―む」動詞、副詞（サ変））
    - 直接反応間接感情表現（「痛む」）
    - その他（接尾辞「―がる」など）
  - 直接・間接同形感情表現（「好き」、「嫌い」、「恨む」など）

［図２］　表現形式による感情表現の分類方法

第四章　感情表現の生起性と恒常性

４．１　感情表現のアスペクトに関する先行研究

森山（1983）、および小泉（1989）は心の動きである感情動詞には明確な終わりが存在しないと述べている。また、関口（2014）は限られた状況では、感情・感覚動詞は完了・完遂が表せるとしているが、言い換えれば、一般的に終わりが存在しないということであろう。もし感情・感覚動詞に終わりが存在しないとすれば、心の動きの絶対時間を測ることは不可能に近いと言えるであろう。また、吉永（2004）は感覚動詞に断続的な持続性という重要な特徴が有していると指摘している。

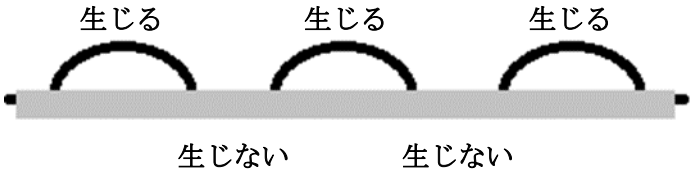
４．２　感情の生起性と恒常性

本節では蔡（2015）の持続時間による分類を再考し、断続的に生じる痛覚を表す「痛む」、「疼く」と生じる間だけ表す「痛い」とは明確な差異が存在すると考え、以下の図のように区別することができ、「生起性感情」と「恒常性感情」と新たに名付けた。

「雨に打たれると **痛い**」

［図３］　生起性感情：生起している間だけ存在する感情

ときどき、ひどく頭が **痛んだ**



［図４］　恒常性感情：生じているか、生じていないかに関わりなく常に存在する感情

また、各分類の生起性と恒常性を検討し、各感情表現の分類と生起性と恒常性の性質との関係は以下のようなものである。

生起性感情：生起している間だけ存在する感情

「純粋直接感情表現」（「楽しい」、「悲しい」、「嬉しい」など）

「間接感情表現（その他）」（「悲しがる」、「泣く」など）

恒常性感情：生じているか、生じていないかに関わりなく常に存在する感情

「属性直接感情表現」（「悲しい」、「苦しい」など）

「直接反応間接感情表現」（「痛む」、「疼く」など）

「直接・間接同形感情表現」（「好き」、「嫌い」など）

生起性感情または恒常性感情

「間接反応間接感情表現」（「楽しむ」、「苦しむ」など）

第五章　感情表現の各語句の分析

５．１　研究対象の選定

本節では、『日本語教育のための基本語彙調査』（1984）の中で感情・感覚に属す117語を『現代雑誌九十種の用語用字』（1962）の「使用率順語彙表」を用いて、使用率の高い順に並べ、計42語を選出した。

愛する	呆れる	焦る	ありがたい*	慌てる
痛い*	嫌*	いらいらする	恨む	嬉しい*
おかしい*	怒る	惜しい*	恐れる	落ち着く
驚く	面白い*	がっかりする	悲しい*	かわいそう
感じる	嫌い	悔しい*	苦しい*	困る
怖い*	寂しい*	残念*	好き	楽しい*
辛い*	泣く	懐かしい*	悩む	憎い*
恥ずかしい*	腹が立つ	腹を立てる	びっくりする	欲しい*
喜ぶ	笑う			

*形容詞を検討する時、対応する「―む」動詞、「―がる」接尾辞も一緒に分析する

５．２　感情表現の各語句の分析
本節では、選出した各語を分析し、それらがどの分類に属すか、また、それらの語の特徴を明らかにした。
５．３　各分類に属する語句および分類の特徴
本節では、各分類に属す語句の特徴である。
５．３．１　「純粋直接感情表現」の特徴
「純粋直接感情表現」に属す語句の特徴
１．内在的、感情主だけが直接知り得る、純粋に感情を表す感情表現
２．外部から観察することができない
３．生起性感情の性質を有している（怖いは例外である）
４．すべての感情形容詞と一部の慣用句が属す
５．３．２　「属性直接感情表現」の特徴
「属性直接感情表現」に属す語句の特徴
１．感情を基準としてある物事を評価、判断する表現
２．主観的な感情表現ではなく、客観的に物事の性質を評価する
３．欲求、好悪など個人の価値観により標準が大きく変わる感情表現を使うことができない
４．ほとんどの感情形容詞が属す（３．の該当する形容詞は属さない）
５．３．３　「直接反応間接感情表現」の特徴
「直接反応間接感情表現」に属す語句の特徴
１．本人しか知り得ない生理的反応を表す
２．動作性が弱く、外から観察しにくい
３．恒常性感情の性質を有している
４．感情主自分で表すこと、あるいは外からの推測することが多い
５．３．４　「間接反応間接感情表現」の特徴
「間接反応間接感情表現」に属す語句の特徴
１．ある対象に対する、あるいは、原因から生じた感情的反応
２．動作性が弱いが、反応・様子で観察することができる
３．主に副詞と感情形容詞に対応する「―む」動詞が属す
４．「驚き」、「怒り」の感情表現は刺激の強さによって動作まで表すことがある

５．他の動詞と結び付いて動作性を強くすることがある
５．３．５　「間接感情表現（その他）」の特徴
「間接感情表現（その他）」に属す語句の特徴
１．外在的、表情または動作などで表わされる感情の表現
２．動作性が強く、容易に観察可能である
３．すべての接尾辞「―がる」、一部の感情動詞と「―む」動詞が属す
４．生起性感情の性質を有している（怖がるは例外である）
５．使用率が低い接尾辞「―がる」の代わりに、「―む」動詞（あるいは同じ感情形
容詞に対応する動詞）の動作性が強くなることがある（喜ぶ、惜しむ）。
５．３．６　「直接・間接同形感情表現」の特徴
「直接・間接同形感情表現」に属す語句の特徴
１．「直接感情」も「間接感情」も表せる感情表現
２．「恒常性感情」の性質を有している
３．「間接感情表現」で表す時、直接観察することではなく、日常の言動、習慣から
知る
４．「愛憎」、「好悪」、「恐怖」など抽象的、状態的な「傾向」に限る
５．形容詞と接尾辞「―がる」のような対立関係が存在しない
５．４　まとめ
感情（感覚）を表す各語句を表現形式によって分類すれば、概ね「直接感情表現＝感情形容
詞」、「間接反応間接感情表現＝『―む』動詞および副詞、動作性が弱い感情動詞」、「間接
感情表現（その他）＝接尾辞『―がる』、動作性が強い感情動詞」といった傾向で分けられる。
しかし、「喜ぶ」、「惜しむ」は、他の「悲しむ」、「苦しむ」のような間接反応間接感情表
現とは異なる分類に属す。また、「好き／嫌い」、「恨む」のような複数の表現形式を持つ言
葉も存在する。
第六章　まとめおよび将来の展望
本研究では感情表現の表現形式による分類を行った。しかし、現段階では、未だ基礎研究の
段階にあり、より体系的な指導法を考えるまでには至っていない。学習者が感情を表そうとす
る時に、調べやすい検索表を作成するためには、さらに分析対象を増やす必要があると考える。
さらに、これらを基に、教材を含め、感情表現の使い分けの指導法を研究していくことを今後
の課題としたい。